

# ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む ——思考に係わる部分——

黒 崎 宏

以下は、ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』の中で、特に「思考」に係わると思われる部分を、独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに、読み且つ解説したものである。私としてはそれなりに、一点の疑惑も残さずに、読み解きたいのである。徹底的に解説したいのである。そのかわり、冗長であると思われる所や強引であると思われる所もあるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。なお、〔 〕は私の挿入である。また〔 〕をとばして読んでも、文章は通じるようになっている。原文のイタリックにはアンダーラインをつけてある。

316. 「考える」という語の意味を明らかにしようとして、我々は、考えながら我々自身〔の内面〕を眺める。〔そして、思う：〕我々がそこに見出すものが、「考える」という語の意味であろう！——しかし「考える」という概念は、當にその様に〔、我々自身の内面を眺めればそこにその意味が見出せるように〕は、用いられていない。(それは、あたかも私が、チェスの仕方も知らないで、チェスの対局の最後の一手を厳密に観察することによって「詰める」という語の意味を見出そうとしているのに、似ていよう。)

317. 誤解を招く対比：泣き叫びは痛みの表出であり、——命題は思念の表出である！

或る人に、他人の——胃の中ではなく——頭の中がどうであるかを知らせる事、これが命題の目的であるかの如くに。

318. 我々が、考えながら話をするとき、或るいはまた、考えながら

書くとき，——私は思うのだが，そして，我々は通常そう思うのだが，——我々は一般に，我々は話すよりも速く考える，とは言わないであろう。そうではなく，我々は一般に，この場合，思考は「話す」という]その表出から引き離され得ないと思われる，と言うであろう。しかし，他面において人は，——考えが稻妻の様に私の頭に閃いた，問題が一瞬にして明らかになった，等々，のように，——思考の速さについて語るのである。この場合，稻妻の様な思考に際しても，考えながら話をするときと同じ事が——ただ極めて速やかに——起こっているのであろうか？ それ故また，稻妻の様な思考に際しては，[思考の] 時計仕掛け言わば一気に進んでしまい，これに対し，考えながら話をするときには，[思考の] 時計仕掛けは [言わば] 言葉でブレーキがかけられて，一歩一歩進むのであろうか？ と問うことは，自然なのである。

319. 私には，或る思念全体を一気に見て取る，或るいは一気に理解する，という事が——私には，思念全体を少しの言葉で，或るいは幾らかの線で，メモする事が可能である，という意味で，——可能なのである。

[しからば] 何が，このメモをこの思念の要約にするのか？

320. 稲妻の様な思考が，語られた思考に対して有する関係は，代数式が，そこから私が展開する数列に対して有する関係と，同じである。

私に例えば或る代数関数が与えられるならば，私は確かに，変数1，2，3，……，10までに対するその関数の値を計算する事が出来る。人はこの確実性を「十分に基礎づけられている」と言うであろう。何故なら，私はその様な関数の計算を学んでいたのであり，等々，であるから。[もっとも，] そうでない場合には，この確実性は基礎づけられていないであろう。——しかし [その場合でも]，その確実性は [計算の] 成果によって正当化されるであろう。

321. 「或る人が [何かを] 突然理解するとき，[一体] 何が起こっているのか？」——この問い合わせの方は，良くない。もしこの問い合わせ「突然理解する」という表現の意味について，であるならば，その答えは，我々が「突然理解する」と呼ぶ或る出来事を指示する事，ではない。

——この問い合わせが意味し得ることは、以下のような事であるかもしれない：或る人が「何かを」突然理解する、という事の「外的な」<sup>しろじ</sup>徵は何か？；【そして】何が、突然の理解に特徴的に随伴する心的現象であるのか？

(人は「一般に随伴現象として」、例えば、自分の顔の表情の動きを感じるものだ、とか、自分の心の動きに特徴的な息づかいの変化を感じるものだ、とかいう想定には、根拠がない。たとえ彼が、注意を自分の顔の表情の動きとか、自分の心の動きに特徴的な息づかいの変化とか、に向けたとたんに、それらを感じるとしても、である。)([同様に一般に随伴現象として、人は自分の]姿勢〔を感じるものだ、という想定には、根拠がない。たとえ彼が、注意を自分の姿勢に向けたとたんに、それを感じるとしても、である。]))

322. 「突然理解する」という表現の意味についての問い合わせ、「何が、突然の理解に特徴的に随伴する心的現象であるのか？」という形で記述されるならば、答えは与えられない。そしてこの事は「人を」、理解するという事は當に特殊で定義不可能な体験である、という推論へと導くのである。しかし「ここで」人が忘れている事がある。それは、我々が関心を持つべき事は、如何にして我々はこれらの体験を比較するのか？；我々は何をこの「体験という」出来事の同一性の規準として確立するのか？という問い合わせなのである、という事である。

323. [数列の展開において]「今や私はその先が分かった！」[と言うこと]は、[一種の]呼びである。それは、自然な「本能的」音に、[そしてまた]歓びの余り飛び上ることに、対応するものである。[しかし]私の感覚からは、私がその先を続けようとするや否や行き詰まってしまう事はない、という事が推論されない事は勿論である。——私がその先を続けようとするや否や行き詰まってしまう、という場合としては、私が[例え]「私が、私はその先が分かった、と言ったときには、私は[確かに]その先が分かっていたのだ。」と言うであろう場合がある。人は、予見していなかった障害が生じ「行き詰まっ」たときに、例え、そういう言うであろう。しかし、予見していなかった事は、単に、[予見していなかった障害が生じて]行き詰まってしまう、という事である必要はない。

次のような事も、考えられ得るであろう：或る人が、いつも見せかけのインスピレーションを感じ、「今私はそれが分かった！」と叫ぶのであるが、しかしそれは、行為によって正当化される事が全くないのである。——彼にとっては、あたかも彼は彼に浮かんだ像の意味を、なんと、瞬時にして忘れてしまうかの如くに、見えるのである。

324. 次のように言ふことは正しいであろうか？ これは帰納法の問題である： [即ち] 私にとっては、この本は手放せば地面に落ちる、という事が確実であるのと同じ程度に、私がこの数列の先を続けることが出来る、という事は確実である；そして私は、この本が落ちないで空中に漂うとしたら驚くであろうのと同じ程度に、もし明白な原因無しにこの数列の展開に突然行き詰まってしまうとすれば、驚くであろう。——これに対しても、私はこう言いたい：我々はまさにこの確実性に対しても根拠を必要としない。私はこの数列の先を続けることが出来る、という事の確実性の正当化としては、その成功に勝るものはないであろう。

325. 「私は——例えば、この式に気づいた、という——この体験をした後で [ならば]、[この数列の後を] 続けることが出来るであろう、という事の確実性は、単に帰納法に基づいている。」 [しかば] かく言うことは、何を意味しているのか？—— [もう一つの例。] 「この火は私に火傷をさせるであろう、という事の確実性は、帰納法に基づいている。」 [しかば] かく言うことは、「私は常に火で火傷をしていた。したがって今の場合も、この火は私に火傷をさせるであろう。」と自ら推論することを意味しているのか？ 或るいは [私は常に火で火傷をしていた、という] 過去のこの経験が、私における [この火は私に火傷をさせるであろう、という] 確実性の、理由ではなく、原因であるのか？過去の経験が確実性の原因なのか？——この問題は、そこにおいて我々が現象の確実性を考察するところの、仮説の体系ないしは自然法則の体系に依存するのである。

確信は正当化されるのか？——人々が何を正当化として認めるのか、という事は、——彼らが如何に考え如何に生活しているか、という事に示されている。

326. 我々はこれを期待し, あれに驚かされる; しかし, 理由の連鎖には終わりがある。

327. [対話者は言う。] 「人は, 語ること無しに, 考えることが出来るのか?」——[ウィトゲンシュタインは答える。] それでは, [そもそも] 考えるとは何なのか?——[対話者は返答する。] では, 君は考えたことが無いのか? 君は君 [自身] を観察し, そして, 君自身において何が起こっているのかを見ることが出来ないのか? そんな事は全く簡単でしょう。君は, 君自身において起こる事を——天文学上の事象を待つように——待ち, そして, 例えは急いでそれを観測しなくてはならない, のではないのである。

328. さて, 人は何を一体「考える」と呼ぶのか? 人は何のために, 「考える」という語を用いることを習ったのか?——私が, 私は考えた, と言うとき, 私は常に正しいと認められねばならないのか? [そうである。] ——この場合, 如何なる種類の間違いが存在する [と言う] のか? 人が「私が今した事は実際に思考であろうか?; [この点に関し,] 私に間違いはないのか?」と問うであろう様な状況は存在するのか? [存在しない。] 或る人が考えながら或る測定をしているとき, 彼がその測定に際し自分自身に語りかけることが無いならば, 彼は [その測定に際し] 思考を中断したのであろうか? [中断しはしない。]

329. 私が言葉を用いながら考えるとき, 私の心に, その言語表現に寄り添って, 更に「意味」なるものが浮かぶわけではない。[私が言葉を用いながら考えるとき,] 言語自身が思考の賦形剤なのである。

330. 思考は一種の語りなのか? 人は言うかも知れない: 思考は, 考えながらの語りを考え無しの語りから区別する [或る] ものである, と。——そしてこの場合, 思考は語りに随伴する或るものである, と思われる所以である。[そしてまた] 思考は, 場合によっては何か或るものに随伴するかも知れないが, しかしこれは自立し得る或る過程である [, と思われる所以である]。

「このペン先は, 確かに丸くなっている。[しかし] まあ, 何とかなる。」

この一行を、先ず、考えながら；次には、考えないで、読め。[何れも可能である。] 次には、そこで言われている事のみを、しかし言葉無しに、考えよ。[これは不可能である。] ——さて [しかし] 私は、或る文章を書きながら、[同時に] 私のペン先を顔を歪めながら吟味する事 [(これは一種の思考である。)] が出来よう。—そして、諦めのしぐさをしながら、その先を続けて書く事があろう。—また私は、何等かの測定に従事していて、私を脇で見ている人が、私は——言葉無しに——「二つの大きさが第三の大きさに等しいならば、それら二つの大きさは互いに等しい。」と考えたと言うであろう様に、行為する事も出来よう。—しかし、ここでそ [れら] の思考を形造っているものは、考え無しでは無しに語られねばならないときに、言葉に随伴しなくてはならない過程、ではない。

331. (声を出さないと読めない人がいるように,) 声を出さないと考えることが出来ない人 [がいる事] を想像せよ！

332. 確かに時には我々は、命題に心的過程が随伴する事を「思考」と呼ぶが、しかし我々は、その様な随伴物を「思考されたもの」とは呼ばない。—或る命題を言え、そして、その命題を考えよ； [次に，] その命題を理解して言え！—さて今度は、その命題を言うな、そして、その命題を理解して言ったときに、君がその命題に随伴させた事のみを、為せ！ [これは不可能である。] —— (この歌を [身体の] 表現をつけて歌え！ そして今度は、その歌を歌うな、しかし、その [身体の] 表現を繰り返せ！—人は確かにこの場合、例えば、身体をゆらしたり、よりゆっくり息をしたり、より速く息をしたり、等々、といった事を繰り返すことが出来よう。[身体の表現は、歌に随伴しているのであり、それ故、歌から分離できるのである。])

333. 「その事に確信を持っている人のみが、その事を言うことができる。」 —— [では] 彼がその事を言うとき、その確信は如何に彼を助けるのか？—その時その確信は、言われた表現に随伴して存在するのか？ [違う。] (或るいはその確信は、低い音が高い音によって覆い隠されるように、言われた表現によって覆い隠されているのか？ 即ちその確信は、人がその確信を大声で表現するとき、いわば、もはや聞き取れなくなっているのか？

[違う。]) 或る人が「人が或るメロディーを記憶に基づいて歌うことが可能であるためには、人はそのメロディーを〔先ず〕心の中で聞き、次にそれをまねて歌わねばならないのだ。」と言ったとしたら、どうであろう？ [そんな事はない。]

334. 「それ故、君は本来は……と言いたかったのだ。」——この言い方を使って我々は、人を或る表現形式から他の表現形式へと導くのである。人は、次のような像を使いたがるものである：彼が本来「言いたかった」事、彼が「思っていた」事、それらは、我々がそれらを言う以前に、既に彼の心の中に存在していたのである。[実は、] 或る表現をやめ、その代わりに他の表現を受け入れるよう、我々を動かすものは、種々様々あり得るのである。この事を理解するには、数学の問題の解決〔努力〕がその問題設定の動機と起源〔(文脈)〕に対して有する関係を考察することが、有用である。「定規とコンパスによる角の三等分」という概念〔を考えよ〕。[この概念は、一方において] 或る人が「定規とコンパスで角の三等分をしようとするときと、他方において、その様な角の三等分は存在しない」という事が証明されているとき〔とでは、全く違う〕。[これは、概念の文脈依存性の主張である。そして我々が、或る表現をやめ、その代わりに他の表現を受け入れようとするのは、この「概念の文脈依存性」によるのだ、というのであろう。]

335. 我々が——例えば、手紙を書いていて——自分の思いに対する適切な表現を見出そうとして苦労するとき、何が起こっているのか？——〔自分の思いに対する適切な表現を見出そうとして苦労する、という〕この言い方は、その過程を翻訳や記述の過程と比較しているのである。即ち、思いは（、例えば、既に以前から）あるのであり、我々はただその表現を探しているのだ、というわけである。この像は、様々な場合に、多かれ少なかれ当てはまる。——しかしこの像は、どんな事にも当てはまるのではないか！——〔例えば、以下の様である：〕私は、或る気分になり、そしてその表現を思いつく。或るいは：或る像が思い浮かび、私はそれを記述しようとする。或るいは：英語による表現が思いつき、そして、それに対応するドイツ語の表現を意識する。或るいは：私は、或る身振りをし、そして自問する、「この身振りに対応する言葉

は何か？」等々。

さて、人が「君は、その表現を得る以前にも、その思いを持っていたのか？」と問うとき、——人は何と答えるべきなのか？ そして、「表現以前にも思いが存在していたならば、その思いは何において成り立っていたのか？」という問い合わせに対しては、どうか？

336. ここで問題になっている状況は、或る人が、人は、ドイツ語の或るいはラテン語の風変りな語順を持っている文【の言わんとする事】を、単純にその【風変りな】語順に従っては考えることが出来ない、と想像するときの状況に似ている。[この状況においては、]人は、先ずその文【の言わんとする事】を考え、そしてその後に、語をその風変りな順序に並べねばならないのである。[ドイツ語の風変りな語順としては、分離動詞を持った文を考えればよからう。]（かつてフランスの或る政治家が書いていたが、フランス語の特徴は、フランス語【の文】においては、語が考える【ときに生ずる語の】順序に並ぶ、という事なのである。）

337. しかし私は文の全体を、例えば既にその【言い】始めにおいて、意図していたのではないのか？ それ故その文は、口から出る以前から、既に私の心の中に存在していたのではないのか？—— [さて] その文が私の心の中に存在していたとすれば、一般には、[口から出たときの語順とは] 違う語順ではない。しかし我々はここで再び、「意図する」という事についての、即ち、「意図する」という語の使用についての、誤った像を描いているのである。[正しい像は、こうである。] 意図は、[心の中に、ではなく、] 状況に、即ち、人間における慣習と制度に、埋め込まれているのである。[例えば、] チェスというゲームが無いとすれば、[即ち、その様なゲームがあるという状況において、でないならば、] 私はチェスをしようと思図することは出来ないのであろう。私【自身】が文の形を予め意図する限りにおいて、私は文の形を予め意図する事が可能であるが、しかしそれは、私がドイツ語【(日本語)】で話すことが出来るという状況において、なのである。

338. それにしても人は、話すことを習得したときのみ、話すことが出来るのである。それ故、何事かを語ろうと欲する人は、その為に、

或る言語を使いこなす事をも習得しなくてはならないのである。とはいへ、何事かを語ろうと欲する人は、何事かを語ろうと欲する際に、[実際にその事を] 語らねばならないのではない、という事は明らかである。それは丁度、ダンスをしようと欲する人は、ダンスをしようと欲する際に、[実際に] ダンスをせねばならないのではない、という事と同じである。

そして、もし人がこれらのことについて考え込んでしまうと、その人の心は、[ダンスをしようと欲する人がしようと/or] ダンスや、[何事かを語ろうと欲する人が] 語〔ろうと/or〕する事、等々、のイメージに、行き着くのである。[何故なら、その様なイメージなくしては、ダンスをしようと欲する人は何をすべきかが分からず、何事かを語ろうと欲する人は何を語るべきかが分からないであろうから。しかし、その様に考えることは間違いなのである。]

339. 思考は、語りに生命と意味を与える、且つ、語りから——いわば、悪魔が〔悪魔に影を売った〕 シュレミールの影を地面から引き剥がすように——引き剥がすことが可能な、非身体的過程ではない。——しかし、如何にして思考は「〔その様な〕 非身体的過程ではない」のか？ したがって私は「〔非身体的過程ではない〕」と言う以上、〕 非身体的過程についてよく知っており、但し思考は〔その様な〕 非身体的過程の一つではない〔、と言う〕のか？ そうではない；私は、「考える」という語の意味を素朴な仕方で説明しようとして困惑し、「〔その様な〕 非身体的過程」という語に助けを借りたのである。

しかし、[単純に] 「思考は非身体的過程である。」と言う事によって、「考える」という語の文法を、例えば、「食べる」という語の文法から区別しようとするのならば、人はその様に言う事も出来るであろう〔、と思うかも知れない〕。ただ〔しかし、〕 その様に言う事によってもたらされる意味の区別は、非常に少ないと思われる。(「思考は非身体的過程である。」と言う事は、数記号は現実的対象であるのに対し、数は非現実的対象である、と言う事に似ている。) 不適切な表現方法は、混乱に陥ってにっちもさっちも行かなくなる確かな方法である。不適切な表現方法は、混乱からの脱出路をいわば遮断するのである。

340. 人は、或る語 [例えば、「考える」という語] が如何に機能するかという事を、[予め] 推測する事は出来ない。人は、その語 [が現実に用いられるそ] の使用を じっくり見て、そこから学ばねばならないのである。

しかしこの学習に [は、それに] 立ちはだかる先入見 [があり、それ] を取り除く事は困難なのである。[だが] その先入見は、愚かな先入見ではない。

341. 考えが無い語りと考えが有る語り [の違い] は、考えが無い音楽演奏と考えが有る音楽演奏 [の違い] に、比べられるべきである。[考えが無い音楽演奏と考えが有る音楽演奏の違いは、それらの音楽演奏自体の違いに現われるよう、考えが無い語りと考えが有る語りの違いは、それらの語り自体の違いに現われるのであって、語る人の非身体的過程の有無によるのではない。]

342. ウィリアム・ジェームズは、語ること無しに考える事が可能である、という事を示すために、耳が聞こえず口が利けないバラード氏の思い出を引用している。バラード氏は幼い頃、喋ることも出来ないので、既に神と世界について疑問を持っていた、と書いているのである。—— [しからば、] 嘶ることも出来ないので、既に神と世界について疑問を持っていた、とは一体どういう意味であり得るのか！——バラード氏は書いている：「私が、如何にしてこの世界は存在するに至ったのか、と自問し始めたのは、私が書き言葉の初步を習い始める二三年前の、愉しい乗り物旅行の時であった。」——人は、[バラード氏に] 問うかも知れない：如何にしてこの世界は存在するに至ったのか、[というこの表現]は、君が未だ言葉を有していなかった時に持った疑問の、言葉への正しい翻訳であるという事に、君は確信があるのか、と。そしてまた、何故この疑問が——さもなくとも全く存在しないと思われるのに——ここで頭をもたげるのか？ 私は、バラード氏の記憶は彼を欺いているのだ、と言いたいのか？—— [実は] 私は、私はそう言うであろうか、という事すら全く知らないのである。バラード氏の思い出は奇妙な記憶現象であり、——そして私は、人はその彼の思い出から彼の過去について如何なる結論を引き出し得るのかを、[全く] 知らないのである！

343. 私が私の思い出を表現する言葉は、私の [——思い出を言葉に翻訳したものではなく—— 「思い出反応 (Erinnerungsreaktion)」とも呼ばれるべき直接的反応] なのである。

344. 人々は、聞こえる言葉では決して喋らないが、しかしそれでも、内的にイメージで自らに語る、という事は考え得るであろうか？

[人は言うかも知れない：] 「人々が常にただ彼らの内面で自らに語るとすれば、その時は彼らは、要するに、彼らが今日でも時折している事と同じ事を、ただ恒常的にするだけであろう。」 —— [そして人は、続けて言うかもしれない：] それ故、人々が常にただ彼らの内面で自らに語る、という事を思い描くことは、全く容易である； [何故ならば、] 人はただ、幾つかの場合から全ての場合への、簡単な拡張をすればよいのであるから。([この拡張は] 「無限に長い並木とは、単に、終わりにならない並木の事である。」 [と言うとき] と似ている。) [これに反し我々は、以下のように言わなくてはならない。] 或る人が自らに語る、という事に対する我々の規準は、彼が我々に語る事と、彼のそれ以外の振舞である； そして我々は、通常の意味において喋ることが出来る人についてのみ、彼は自らに語る、と言うのである。そして我々は、鸚鵡についてもレコードについても、自らに語る、とは言わないでのある。

345. [人は言う：] 「時折起る事は、常に起るかも知れない。」 —— [では] この命題は、如何なる種類の命題であろうか？ この命題は、「F(a)」が意味を持つときには「(x) F(x)」も意味を持つ、という命題に似ている。

[また、人は言う。] 「或る人が或るゲームで間違った手を打つ、という事が起こり得るならば、全ての人が全てのゲームで間違った手以外の手は打たない、という事も可能であろう。」 —— 「しかし、」 かく言うとき我々は、我々の表現の論理を誤解し、我々の語の使用を間違って表現するよう、誘惑されているのである。

命令は時折従われない [事がある]。[これは事実である。] しかし、命令が決して従われないとしたら、どういう事になるであろうか？ [その時は、] 「命令」という概念は、その目的を失うであろう。[そして、無意味になるであろう。]

346. しかし我々は、神が鸚鵡に思考力を突然与え、そして今や鸚鵡は自らに語るのである、という事は想像出来ないであろうか? ——しかし、ここにおいて大切な事は、私はこの事を想像するのに、神についての想像に頼っている、という事である。

347. [人は言うかも知れない:] 「とはいへ私〔自身〕は、「自らに語る」という事が何を意味しているかを、私自身の場合から知るのである。そして、もし私の声帯が摘出されたとしても、なお私は自らに語る事が出来るであろう。」

[しかし、] 私が私自身の場合からのみ「自らに語る」という事を知るのであれば、私は、私がそう呼ぶものについてのみ、知っているのであって、他人がそう呼ぶものについては、知らないのである。

348. [或る人が言う:] 「これらの聾啞の人々は全て、身振り言語のみを習得している。しかし彼らは皆、音声言語で内的に自らに語っているのである。」 —— [そして、問う:] さて、君はこの文を理解しないのか? —— [ウィトゲンシュタインは答える:] 一体私は、私がその文を理解しているか否かを、如何にして知るのか?! ——私は(もしそれが情報であるとして) その情報で何をする事が出来るのか? ここにおける理解という観念には、全くうさん臭い匂いがする。私は、私はその文を理解していると言うべきか否かについて、知らないのである。私は答えて言いたい: 「その文はドイツ語〔(日本語)〕の文であり、 ——人がそれで何かをしようとする迄は —— 全く正常に見えるのである; その文は他の様々な文と或る〔文法的〕関係にあり、そしてその関係が我々をして、人はその文が我々に知らせてくれる事を本当は知らないのだ、と言ひ難くしているのである; 哲学する事によって無感覚になっているのではない人々は皆、ここには何か正しくない事がある、という事を察知しているのである。」

349. 「しかし、[我々は、通常の意味において喋ることが出来る人についてのみ、彼は自らに語る、と言うのである、という] この想定は、やはり確かに或るしっかりした意味を持っている!」 —— その通りである; 「[自らに語る] という] この言葉と像は、[「通常の意味において

喋ることが出来る人」という] 通常の状況においては、我々に良く知られた使用を有している。——しかしもし我々が、その様な使用が欠けている場合を仮定するとすれば、我々は、「自らに語る」という] この言葉と像の [通常の状況に囲まれてはいない] 裸の姿を、いわば初めて意識するのである。[P. M. S. Hacker, Wittgenstein : Meaning and Mind, p. 371, 参照]

350. [ここで、次のように言われるかも知れない：] 「しかし、私が、或る人が痛みを持っている、と想定するとき、私は単に、彼は私が非常にしばしば持ったものと同じものを持っている、と想定しているのである。」—— [しかし] その様に言うとしても、少しも前進した事にはならない。それは、次の様に言うようなものなのである：「勿論君は、「ここは [今] 5時である。」という事がどういう事であるかを、知っている；それ故君はまた、太陽の上で [今] 5時である、と言う事がどういう事であるかをも、知っている。[何故なら、] 太陽の上で [今] 5時である、という事は、まさに、太陽の上では [今]、ここで [今] 5時である時のこと、全く同じ時刻である、という事なのである [から]。」——この [太陽の例の] 場合には、同じという事による説明は機能しない。何故なら、確かに私は、人はここでの5時と太陽の上での5時を「同じ時刻」と呼ぶことが出来る、という事を知っているとはいえ、しかし私は、如何なる場合に人は、ここと太陽の上は同じ時刻である、と言うべきかを、知らないのであるから。[ここでの5時と太陽の上での5時は、同じ「5時」であるから、「同じ時刻」と呼ぶことが出来る。したがって、ここと太陽の上は同じ時刻である、と言えるためには、予め、太陽の上での時刻の決め方がなくてはならない。しかし、それが無いのである。したがって私は、如何なる場合に人は、ここと太陽の上は同じ時刻である、と言うべきかを、知らないのである。]

全く同様に、彼は痛みを持っている、という想定は、まさに、彼は [かつて] 私が持ったものと同じものを持っている、という想定である、と言っても、何の説明にもならない。何故なら、もし人が、ストーブが痛みを持っており、そして私も痛みを持っている、と言うとすれば、人は、ストーブは私が持っている体験と同じ体験を持っている、と言うであろうが、文法のこの部分は、私にとっては全く明らかであるから。[問題は、

〈彼は痛みを持っている〉という想定自体が如何にして行なわれるのか、という事なのである。]

351. とはいへ我々は、それでもこう言いたいかも知れない：「痛みの感覚は、痛みの感覚である。——彼がそれを持っていると、或るいは、私がそれを持っていると；そしてまた、彼がそれを持っているか否かを、私が知ろうと知るまいと。」——私は、〔或る意味で〕そう言う事に同意してもよい。——そして、もし君が私に「私が、このストーブは痛みを持っている、と言うときに意味している事を、いったい君は知らないのか？」と問えば、——私は次のように答える事が出来る：このストーブは痛みを持っている、という言葉は、私をあらゆる種類の想像に駆り立てるかも知れない；しかし、それらの想像の有用性は特にない。そして〔想像という事に関してならば〕私が、「太陽の上では丁度午後5時であった」という言葉でも、何かを——例えば、5時を指している振子時計を——想像する事ができる。——しかしまっと良い例は、〔丸い〕地球上での「上」と「下」の使用であろう。この場合我々は皆、「上」と「下」が何を意味しているかについて、全く明瞭な想像〔(イメージ)〕を持っている。〔そして〕確かに私は、〈私は〔地球の一番〕上におり、地球は確かに私の下にある〉という事を見て取っているのである！（どうかこの例を笑わないでほしい。確かに我々は既に小学校で、この様に言うことは愚かな事である、と教えられた。しかし、〔この様に言うことは愚かな事である、などと言って、そこに含まれている〕問題を覆い隠すことは、〔その〕問題を解くよりも、はるかに易しいのである。）そして、この場合「上」と「下」は普通の仕方では用いられていない、という事は、熟慮の末やっと分かる事なのである。（我々は例えば対蹠人——我々からみて地球上の正反対側の場所に住む人——を我々の「下」にいる人として語ることが出来る。しかし、もし対蹠人が我々と同じ様に「下」にいる人として語るならば、〔それもまた〕正しいとして認められなくてはならないのである。〔したがって、「下」の「下」は「下」ではないわけであり、それ故、全く明瞭な想像〔(イメージ)〕などと言うものも、全く当てにはならないのである。】）

352. さて、ここにおいては、我々の思考は奇妙な悪さをしているのである。即ち我々は、排中律を引き合いに出して、「彼には、その様な

像が心に浮かぶか浮かばないかの何れかであって、第三の場合は存在しないのだ！」と言いたいのである。——我々は、哲学の別の領域においても、この奇妙な議論に遭遇する。[例えば]「 $\pi$ の無限展開において「7 7 7 7」という配列は、いつかは起こるか起こらないかの何れかであって、——第三の場合は存在しない。」[と言うのが、これである。] 即ち神は、 $\pi$ の無限展開において「7 7 7 7」という配列が起こるのか起こらないのかを、[予め] 見 [通し] ているのであり——ただ我々はそれを知らないだけだ [、と言うのである。] しかし、その様に言うことは、何を意味しているのか？——我々はある像を用いているのである；その像は、見ることが出来る数列の像であるが、[その全体を] 見通す事が、神には出来るが我々には出来ない像、なのである。ここにおいて排中律が言っていることは、それはその様に見えねばならないか、或いはこの様に見えねばならないか、の何れかである、という事なのである。したがって排中律は本来——これは全く自明なことであるが——何も語ってはいないのであり、[ただ] 我々に或る像を与える [のみ] なのである。かくして今や問題は、現実は [排中律が与える] その像と一致するのかどうか、という事であるべきなのである。さてその像は、我々は何を為すべきか、我々は何を如何に探すべきか、を決定するように思われる。——しかしその像は、[何も] 決定しはしない。何故なら我々は、それは如何に適用されるべきかを、全く知らないのであるから。もし我々がここで「第三の場合は存在しない。」とか「そうは言っても、第三の場合など存在しない！」と言うとすれば、——そのときは、かく言う事の内に、我々はその像から視線を外らすことが出来ない、という事が表現されているのである。——その像は、その内に既に問題とその解答が含まれているに相違ないかの如くに——他方では、そうではない、と感じるとはいえ——見えるのである。

同様に、もし人が「彼はこの感覚を持っているか、持っていないかの何れかである！」と言うとすれば、——そのとき我々には、その言明の意味を誤解の余地なく既に決定しているかの如くに思われるところの或る像が、何にもまして浮かんでいる。[そこで] 人は「今や君は、何が問題であるかを、知っている。」と言うかも知れない。しかし、そうは言っても彼は、まさに、何が問題であるかを、依然として知らないのである。[像は、何の役にも立たないからである。]

353. 或る命題についての検証の可能性と仕方に関する問いは、「君はそれをどう思いますか?」という【一般的な】問い合わせの、特殊な形に過ぎない。[そして、そに対する] 答えは、その命題の文法についての、一つの寄与をなす。

354. 我々が文法において規準と徴候の間で揺れ動くと、そもそも徴候しか無いかの如くに、思われてくる。例えば我々は、次のように言う:「経験は、気圧計が下がっているときは雨が降っている、」という事を教える。しかしながら経験は、我々が或る一定の濡れた感じと寒さの感じを持つときは雨が降っている、或るいは、シカジカの視覚印象をもつときは雨が降っている、という事をも教える。」そして更には人はこれを支持する議論として、これらの感覚印象は我々を騙すかもしれない、と申し立てる。[我々を騙すかもしれないそれらの感覚印象は、徴候に過ぎないわけであり、したがって「経験は……教える」というわけである。]しかし人はその際、感覚印象は我々に雨が降っていると本当に思い違いをさせる、という事実は、或る定義【——規準——】に基づいているのである、という事を考慮していない。

355. 問題は、我々の感覚印象は我々を騙すかもしれない、という事ではなく、我々は感覚印象の言語【——例えば「と感じる」「の様に見える」等々——】を理解している、という事である。[例えば感覚印象の言語「雨が降っている様に見える。」を理解しているという事は、事象そのものの言語「雨が降っている。」を理解しているという事を、含んでいるのである。] (そしてこの【感覚印象の】言語は、他の如何なる言語もそうであるように、取り決めに基づいているのである。)

356. 人は言いたがる:「雨が降っている、或るいは、雨は降っていない。【(排中律)】——【しかし】私が、雨が降っている、という事を知る仕方、即ち、雨が降っている、という事についての情報を得る仕方は、【その排中律とは無関係な】別の事である。」しかば我々は、何を私は「雨が降っている、という事についての情報」と呼ぶのか、という問い合わせ立ててみよう。(或るいは、私は「雨が降っている、という事についての情報」についてもまた、単に情報が与えられるだけなのか? 【そうであると

すれば、それは無限後退への第一歩である。]) そしてそれでは、何がこの「雨が降っている、という事についての情報」を或る事についての情報とするのか？ ここにおいて 「[「雨が降っている、という事についての情報」という] 我々の表現形式は、我々を誤解に導いてはいないであろうか？ [導いている。] 「私の眼が私に、そこには一つ椅子がある、という事についての情報を与えている。」 という表現は、まさに我々を誤解に導く比喩ではないであろうか？

357. 我々は、犬はもしかしたら自らに語っている、とは言わない。我々がそう言わないのは、我々は犬の心をよく知っているから、であろうか？ [そうではない。] さて、人はこう言うかもしれない：人が生物の振舞を見るとき、彼はその心を見るのである。——私は、私【自身】についてもまた、私はシカジカに振舞うが故に、私は自らに語っている、と言うのであろうか？ [そうではない。] ——私がそう言うのは、私の振舞を観察して、ではない。しかし、私は自らに語っている、という事が意味を持つのは、私がその様に振舞うからである。——それでは、私は自らに語っている、という事が意味を持つのは、私がそう思っているからではないのか？ [そうではない。]

358. しかし、命題に意味を与えるのは、我々が【そう】思うから、ではないのか？ (そして、人は語の無意味な並びで【何かを】思うことは出来ない、という事は、命題に意味を与えるのは、我々が【そう】思うから、なのではないのか？) そして、思うという事は、心的な領域における何かである。しかし、思うという事は、何か私的な事でもある！ 思うという事は、はっきりと捉える事が出来ない何かである。それは、ただ意識それ自体とのみ比較可能なのである。

この様な事を、人は如何にして笑うべき事と見なし得ようか！ [見なし得ない。] 確かにそれは、いわば、我々の言語の夢なのである。[しかし、見ても不思議ではない夢なのである。]

359. 機械は考える事が出来るか？——機械は痛みを持つ事が出来るか？——さよう、人間の身体は [，考える事が出来、痛みを持つ事が出来る，] その様な機械であると言うべきではないのか？ 人間の身体は、

確かにその様な機械に限りなく近い。

360. しかし確かに、機械は考えることが出来ない！—— [さて、] これは経験命題であろうか？ そうではない。我々は、人間および人間に似ているものについてのみ、それは考える、と言うのである。[それ故、] 我々はまた人形について、そしてまた精霊についてさえも、それは考える、と言うのである。「考える」という語を道具と見なせ！「考える」という語に対応する一定の実在があるわけではないのであるから。]

361. 椅子は内心で……と考えている。

[では、] 何処でか？ その一部分でか？ 或るいは、その外部でか？ [例えれば、] その周りの空気でか？ 或るいは、全く何処ででもないのか？ しかし、全く何処ででもないとすると、この椅子が自らに語る事と、そのすぐ隣にある他の椅子が自らに語る事は、何によって区別されるのか？——しかしそれでは人間の場合、何処で彼は自らに語るのか？ [人間の場合、] 何処で彼は自らに語るのか、という問いは無意味に思われ、当にこの人が自らに語るのだ、という事以外に、如何なる場所の特定も必要ではない、という事になるのは、どうしてなのか？ これに対し、何処で椅子は自らに語るのか、という問いは、[無意味ではなく、何等かの] 答えを求めているように思われる。——その理由は、こうである：我々は、如何に椅子はこの場合人間に似ていると思われるのか——例えば、頭は背もたれの最上部にある、等々——を知りたいのである。

人が内面で自らに語るとき、この「自らに語る」という事は如何にして行なわれるのか？ [この時、] 内面には何が起こっているのか？ ——「自らに語る」という事を、私は如何に説明すべきなのか？ さよう、ただ君が或る人に「自らに語る」という表現の意味を教えるであろうように、である。[説明するということは、結局のところ、教えるという事なのである。] そして我々は、子供の時、「自らに語る」という表現の意味を確かに習ったのである。——ただ誰も、我々にそれを教えた人は我々に「内面で起こっている事」を語った、とは言わないであろう。

362. [しかし] 我々には、はるかに、以下のように思われる：この場

合、教師は生徒に「自らに語る」という表現の意味を——生徒にその意味を直接言うこと無しに——教え込むかの如くなのであるが、しかし最終的には、生徒は自らにそれの正しい直示的説明を与えるまでになるのである。そしてここには、我々の幻想があるのである。